大内義隆の花押

陶晴賢の花押

系図』では、大友義鎮・晴英兄弟の母が大内義興の娘とあり、大内家と姻戚であった。しかし、『大友氏系図』では、母は坊城氏という。

大内義隆には実子がなく、大友晴英を養子とする話が進んでいたとき、妾腹に義尊が誕生したために破談になっていたという。これを陶隆房が復活させると、大友義鎮は反対したが、晴英の方が強く希望して、天文二十一年二月、山口へ渡った。豊後より、橋爪美濃守鑑実と吉弘右衛門大夫が随行した。晴英は大内義長と改名し、陶隆房も晴賢と改称した。

豊前守護代杉重矩切腹

陶晴賢は大内分国に強大な力を振るうが、主人殺しの誹に苦しみ、これを杉重矩が唆かしたからだとして切腹させ、自らも出家して全姜と号した。天文二十二年十月、吉見正頼が晴賢の命令に従わず、石見津和野に引き籠ったので、三本松城を包囲し、長期戦となった。

翌天文二十三年五月、大友義鎮と密契を結んだ毛利元就が安芸に挙兵し、周防へ侵入しようと動き始めた。陶晴賢は、九月、吉見正頼と和睦して、ただちに岩国へ出陣し毛利氏に対した。

陶晴賢の滅亡

弘治元年（一五五五）十月朔日、陶晴賢は厳島で、毛利元就・隆元父子に不覚をとり自殺した。行年三十五歳であった。晴賢の子長房も、富田若山城を、豊前守護代杉重輔兄弟に攻められ自刃した。父杉重矩の仇を討ったのである。この重輔も翌弘治二年三月二日、長房の母の弟内藤隆世に攻められ、山口市街を灰燼に帰させて主従七〇余人も滅んだ。

大内義長自害

こうした義長の重臣たちの抗争の間に、毛利元就は、調略と力攻めを並行し、山口に迫った。義長は、山口高嶺城の要害が完成しないのをみて、内藤隆世とともに長門国豊浦郡に奔り、且山城（下関市）に籠城した。

弘治三年四月、毛利方は、内藤隆世が切腹すれば、義長は殺さないという条件で、隆世を説得し、自刃させ、義長は下城して、長福寺に入った。

大内義長の花押

四月三日、毛利方は長福寺を囲み、義長を切腹させ、大内氏は滅亡した。

天文二十一年（一五五二）十一月、**西郷刑部丞隆頼**は、父の治部丞（のち対馬守）家頼が大内義隆から安堵された所帯を大内義長に安堵してもらった。隆頼は義長の大内家相続に積極的に協力した。

大内義隆が滅びて、陶晴賢とそのカイライ大内義長が、大内分国を継承・統治しているころ、豊後の大友義鎮は、肥後の菊池義武（大友義鑑の弟）を滅ぼし、国内の反義鎮分子を一掃して、目を肥前国に向けていた。

肥前では、天文十六年、大内勢の応援を得て帰国した龍造寺胤栄（隆信の義父）に攻められて、少弐冬尚が筑後国に奔ったので、守護職は大内義隆の手に帰した。義隆が滅びると、江上・小田・神代等の国人は、

少弐冬尚を担いで、守護代龍造寺隆信の拠る佐嘉城を包囲して隆信を降伏させた。筑後柳河の蒲池鑑盛のもとへ亡命した龍造寺隆信は、肥前国守護になって頂きたいと、大友義鎮に働きかけて、義鎮の支援を求め、帰国の機会を狙った。

大友義鎮の肥前進出　天文二十三年五月、毛利元就は陶晴賢と袂別して安芸を掌中に収め、弘治元年（一五五五）十月、陶晴賢を滅ぼすと、周防・長門への侵入を開始する一方で、豊前・筑前の国人を味方に引き入れる工作を開始した。大友義鎮は天文二十二年七月、分国筑後の国人を動員して龍造寺隆信を援けしめ、佐嘉城を奪回して龍造寺隆信を守護代の地位に戻し、京都の要路へ多大の献金をつづけて、天文二十三年八月、ついに肥前国守護職を手に入れた。

豊肥筑の国人一揆　龍造寺隆信に対抗して少弐家再興を策する肥前の国人らは、筑前・豊前の独立的な国人に呼びかけて、広汎な国人一揆を成立させ、大内義長の支配から離脱させようと動いた。その国人を代表するのが古処山（甘木市、標高八六二㍍）に拠る秋月氏、五箇山（那珂郡五ヶ山）に拠る筑紫氏、上毛郡の山田氏、長岩城（下毛郡津氏）に拠る野仲氏である。

大内義長の政権は、毛利元就の侵攻に対する防戦に追われ、豊筑の分国は、弘治二年（一五五六）末には無政府状態となった。

大友義鎮と毛利元就の密約　弘治二年の中ごろ、小寺元武の画策によつて、周防・長門を毛利元就が、豊前・筑前を大友義鎮が切り取るという密約が成立した。

大友義鎮は、救援を求める弟義長の居る防長へは、この密約に従って出兵しなかったが、豊前へは、弘治三年二月ごろ、自ら宇佐郡龍王城（安心院町）まで出張し、万代平城（耶馬渓町福土）の武将豊田対馬守を攻めて自刃させた野仲十郎重兼を屈服させたのち撤兵したらしい（『佐田文書』）。

大友義鎮の花押

秋月氏の馬岳占領　これより前の弘治二年六月ごろ、秋月文種が中豊前に侵入して、**馬岳城**を攻めた。城督神代余三兵衛尉弘綱はほとんど抵抗もせず城を明け渡した。秋月文種は家臣ヨシカイ・ミナギ両人を城将として、一〇〇余人で守らせた。神代弘綱はこのため、敷田庄（宇佐市）等の給地を没収されてしまった（『秋原文書』）。

鉾立峠より城井上城址を望む

弘治三年四月三日、大内義長が赤間関で滅ぶと、大友義鎮は公然と豊前・筑前の切り取りに乗り出した。五月十四日には、毛利元就・隆元父子へ長文の書状を遣わして、豊筑への干渉、特に秋月文種への助勢をしないよう申し入れた。

山田隆朝の挙兵　この月十八日、上毛郡の山田安芸守隆朝・仲八屋宗

種・仲間統種・如法寺氏らが秋月文種に呼応して、築城郡の**城井左馬助**（信義か）の宅所へ押し寄せ、放火して退却した。この時の合戦で、城井左馬助方は仲八屋衆の首二、山田衆の首一三を討ち取り、これを玖珠郡まで出張していた大友義鎮のもとへ送った。城井方に加わって防戦した八屋衆も七〇人ほどの負傷者を出した。大友義鎮は、宇佐郡代佐田隆居に山田隆朝との和睦の斡旋を依頼して、隆朝の子息万千世を佐田方に預けるよう説得させたが不調に終わり、豊後北浦辺衆（国東郡衆）の一万に近い大軍を豊前に侵入させた。

広津城の合戦

六月朔日、武蔵田原親賢（のち紹忍）・木付鎮秀が妙見岳城に入り、大内方の城督杉因幡守隆哉は下城して広津城に入った。杉隆哉はのちに犀川町大村に住みその城が**因州城**と呼ばれた。六月十八日、山田勢が広津城（吉富町）に押し寄せ、籠城していた佐田隆居ら宇佐郡衆、野仲鎮兼ら下毛郡衆との間に戦闘が行われ、翌日までに、山田方は戦死一〇〇、負傷二〇〇人を出して敗退した。二日後、国東の田原親宏軍が到着し、山田城を攻めて、上毛郡一帯を焼き払った。山田安芸守は山中に姿を隠し、残党狩りで八〇〇余の首が挙げられ、女人も略奪されて、上毛郡の男女の四分の一が逃散したという。山田隆朝の長子万千世丸（十一歳）は下毛郡の秣刑部に捕らえられ、その首を田原親宏へ差し出された。親宏は玖珠郡へ出張している大友義鎮のもとへこれを送って感状を得た。山田安芸守は防長へ渡り、毛利元就に仕えた（『西郷』『文書』）。

馬岳落城

田原親宏らは軍を仲津郡に進め、七月四日、馬岳城をたちまち攻略した。秋月方の城督ヨシカイ、皆木甲斐守以下一〇〇人ばかりを討ち取ったが、田原方も松木・萱島の家来を失った（『永弘』『文書』）。

佐田弾正忠隆居も馬岳小城切岸の合戦に活躍し、感状を得た。

今度馬岳小城切岸において、最前より御放戦の趣、比類無く候、殊に小城調略の儀、御一人の御才覚、他に異り候、御粉骨の次第、注進を遂ぐべく候、恐々謹言

（弘治三）七月九日　　（田原）親宏（花押）

佐田弾正忠（隆居）殿　　御陣所

（原漢文）

田原親宏軍はさらに筑前千手・馬見表へ越山して、秋月文種の楯籠る古処山を背後から攻めようとしたが、その前に、古処山籠城者に裏切る者が出て、七月十一日落城し、秋月文種は自殺、その子三人は姿を隠し、のち中国の毛利元就のもとに匿われて成長する。

この年九月には、大友義鎮による豊筑の国盗りが完了したらしく、豊後より九人の検使が派遣され、闕所地の摘発が行われ、これに基づいて、恩賞が発表された。

二　西郷隆頼の挙兵と門司城争奪戦

大友　義鎮　九州探題に

永禄元年（一五五八）六月、田原親宏は再び京都郡へ出陣し、さらに小倉で首二八〇を取って築城の別府へ帰陣した。前年の検使の入部に反発して挙兵する者があったのであろう。永禄二年正月、龍造寺隆信は、少弐冬尚を攻めて自刃させ、少弐氏は消滅した。この年六月、大友義鎮は幕府へ莫大な献金を続けて、豊前・筑前・筑後の守護職に補任され、四か月後、さらに九州探題職・大内家督・周防・長門守護職までも与えられて八か国の守護職に任じら